

Title	『韻府群玉』版本考拾遺
Sub Title	A supplement to the comparative study of the printed edition of the Yùn fǔ qún yù
Author	住吉, 朋彦(Sumiyoshi, Tomohiko)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2016
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.51 (2016.) ,p.107- 141
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20160000-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『韻府群玉』版本考拾遺

住吉朋彦

韻書の編成を用いて典故集に發展させ、後世に「摘錦之屬」と呼ばれる類書の型を打立てた『韻府群玉』（以下「韻府」と簡称）は、元初の学士が、古典体得の志を保とうとする脈絡中に培われた書として、大徳十一年（一三〇七）に初めて世に顯れた。本書の編集は江西奉新の陰氏一族の手に係り、その序に拠ると、宋理宗朝の進士であつた陰応夢、号竹埜が、六男の幼遇（時遇）、号勁弦の稽古のために示した凡例に基づき、元至元十四年（一二七七）以降、三十年の間に時遇によって編集され、四男の幼達、号復春が注釈を加えた書、と考えられる。

陰応夢は、大徳十一年に本書の序を記しているが、序中にさるなる校正を求め、遂にその公刊を見ることなく、延祐元年（一

三三四）に歿した。恐らく本書が現行の姿を整えたのは、同年八月に幼達が序を附し、注釈の完成を告げて以降のことである。この年月は、延祐の科挙復興の時節を捉えたかたちであるから、その後、時を経ずして刊行の便宜を得たものであるう。

現存する本書の最古版は、元統二年（一三三四）梅溪書院の刊記を有つ元版であり、該版は、その刊年が知られる限り最も早いだけではなく、本文系統上に於いても諸本の源に位置しており、初版の本文を伝える版種と見做される。ただ現行本の「増修韻府羣玉凡例」十三条のうち末尾四条は、元本に増加された事項と注記される。この増修が、大徳十一年から延祐元年の間に為されたのか、延祐から元統二年の間に為されたのかは不明

で、初刊の後に増修が加わった可能性も否定できない。

さて、本書は十四世紀以降の東アジアに流行し、広く学問韻事の基礎を提供した。この間、元元統二年刊本の系統に、少なくとも六版を重ねただけでなく、種々の改編本、増修本や、続編を派生した。その諸本は、稿者の種別に拠れば三類十属に分けられる。これを列挙すると、下記の通りである¹⁾。

一 原本

原本之属

洪武韻本之属

二 新增説文本

新增説文本之属

新增説文王元貞校本之属

新增直音説文本之属

増刪本之属

摘要本之属

三 続編本

続編之属

増続会通本之属

増続会通改編本之属

このうち、最も晚い摘要本の出現が清乾隆七年（一七四二）頃であり、それぞれの版の後印本を考慮に入れても、十八世紀には版本の印行がほぼ終息している。これは、明代に編まれた後続の書、『五車韻瑞』を経て、さらに拡大編集された『佩文韻府』の流布に従い、その役割を終えたものと考えられる。

稿者は先に、これら本書版本の全貌を把もうと、諸伝本に取材して版本の特質を捉え、本誌第三十五至三十九輯に「韻府群玉」版本考（一至五）（二〇〇一至五年）を記し、版本の整理を行った。またその後も修訂を図って、主に中国での調査を追加し、前記の諸稿を拙著『中世日本漢学の基礎研究 韻類編』（二〇一一、汲古書院）に収録する機会を得て、記述を増補した。拙著刊行の際には、本書版本の概要を記述し得たと考えたが、その後、折に触れ新規に伝本を著録してみると、早くもその遺漏に突き当たる仕儀となった。版本研究の常態とは言うものの、版種のレヴュエルに於いても記述を補正すべき実質のある点が明らかとなった。参考者には繁雑な提示となり甚だ心苦しいが、本稿には拾遺と銘打ち、新たな著録に基づいて考証を補正し、当座の責を埋める措置としたい。

以下、伝本の追加や補正のあった版種に限り、種属毎に版本

の提要を行った後、新規の修訂を加える。

○原本之属

『韻府』原本は、現存本の源となった元元統二年（一三三四）刊本の後、元至正二十八年（一三六八、即ち明洪武元年）刊本、明嘉靖三十一年（一五五二）序刊本、〔明〕刊本と、元明に版を継いだ。また国外にも伝播して、日本〔南北朝〕刊本、朝鮮明正統二年（一四三七）跋刊本、〔朝鮮前期〕刊本を生じた。

後掲の忠南大学校中央図書館蔵九冊本（F・二四）は、七種伝本の混配であり、版種を以って言えば、上記のうち朝鮮版二種の配合である。今、本稿の原則に従って、これらを旧伝に分け、版種毎、印出順に列して現況を記述する。

韻府羣玉二十卷

元陰時遇（時夫）編 陰幼達（中夫）注

朝鮮明正統二年（一四三七）跋刊（江陵 原州）

覆元元統二年（一三三四）刊本

先ず「韻府羣玉序」 翰林 滕玉霄序／（中略）吾友／陰

君昆仲爲韻府羣玉以事繫韻以韻摘事／經史子傳蒐獵靡遺（中略）

翰林滕賓序」 姚江村序／（中略）今 陰氏兄弟／研精鉤

玄撥韻繫事（中略）至大／庚戌騰江村姚雲」 翰林承旨趙

子昂題／上涉羣經下苞諸子賢於回溪史韻多矣／吳興趙孟頫題」

「 陰竹筵序／（中略）一日登書樓見李子斐凡萬籤問／之曰

幸父兄與歲月暇得恣獵羣籍遇／欣然與意會處筆之將繫於韻摘其

異／而會諸同也（中略）爰授以／凡例俾勉爲之垂三十載告成予

方披／閱間有客過竹所見而獎許之過情請／名曰韻府羣玉（中略）

客又曰文／公器也私諸己孰若公諸人秘論衡以／爲異者未廣也請

綉諸梓予益難之（中略）於後進或有毫／髮助瓊瑜之瑕可匿也（中

略）客曰唯大德丁未／春前進士竹筵倦翁八十四歲書于聚／德樓」

「 陰復春自序／（中略）故凡事必類則易見義必釋則易／知

也予季以事繫韻多所摘奇豈皆能／判然無疑者疑而不釋是猶摘墮

／冥行而已（中略）故／隨字註釋以備觀鑒庶乎索韻而得事／考

釋而無疑其亦有少補云延祐改元／甲寅秋鄉試後五日幼達書」

陰勁弦自序／是編敬遵 先子凡例刻意纂集幸績／于成繼得二

三同志者相與讎校其是／否而損益之書成而失怙痛哉謹奉遺／訓

質正於儒林巨擘爰錄諸梓用廣其／傳惟冀先志云尔（中略）時遇

謹白」とあり。

次で「増修韻府羣玉凡例」、「韻下類目」を附す。

次で「韻府羣玉該載事目」。

次で「韻府羣玉目錄」。

目錄尾に双辺有界「元統甲戌春／梅溪書院刊（書楷）」牌記あり。

卷首題「韻府羣玉卷之一（隔三）上平聲（墨開）／（六格以下低）晚學 陰

時夫 勁弦 編輯／新吳 陰 中夫 復春 編註」、次行

二格を低し「一東獨用」、次行より本文。先ず字目（大字、單行）、直下

より注（小字双行、同音、字の首に反切）。每韻改行。卷之二十に至る。

四周双辺（二〇・二×二・四糰）有界、每半張十行、行大十

四字半格、小二十九字。版心、中黒口（接内、局）。三（首のみ四）

黒魚尾、第二（首のみ第三）魚尾下張數。

卷尾題「韻府羣玉卷之幾（隔三）何聲（墨開、陰刻）」。

末に南秀文跋（一張）、低二格、諱字双擡「上略」宣德乙卯秋

／江原道監司臣柳季聞拜辭之日／上諭之曰群玉為書其於文士所

裨實多予欲／刊布卿其不煩民以圖之越明年春慕游／手備材以／

聞爰／命集賢殿出經筵所藏善本二部參校送之於／是始鑄于梓用

廣其傳於戲我／殿下留神經傳無書不刊而又拳拳於是編使／儒者

皆獲至寶其廣惠後學於無窮也至／矣盡矣正統二年丁巳六月日朝

奉大夫／集賢殿應教知製 教經筵檢討官兼春／秋館記注官臣南
秀文拜手稽首敬跋（書楷）、每半張十行、行十八字格。跋後一行
を隔て低九格にて「江陵原州分刊」と刻す。

〈忠南大学校中央図書館 F・二四のうち〉

卷一至二 五 十至十四 十八配同版本

卷十六 十九配〔朝鮮前期〕刊本

卷三を存す（九冊のうち一冊）。新補表紙（二七・二×一六・

〇糰）。次で外皮を欠く後補表紙あり、試筆の後、左肩に題簽

を貼布し「韻府羣玉〈平聲〉」と書す。本文、唐風の藁精紙印。

卷三首匡郭二〇・三×二・三糰。早印本。

朱筆にて字目傍点書入、極稀に墨筆にて欄上補注書入あり。首

に単辺方形陽刻「完山／」朱印記、鼎中同「訥／庵」朱印

記、尾に単辺方形陽刻「宋眉／老章」、方形陰刻「常山／後人」

朱印記を存す。

〈忠南大学校中央図書館 F・二四のうち〉

卷一至三 五 十至十四配同版本

卷十六 十九配〔朝鮮前期〕刊本

卷十八を存す（九冊のうち一冊）。新補表紙（二八・五×一六・

〇糶）。次で後補丁子染艶出表紙、左肩に淡紅地題簽を貼布し

墨囲双辺「韻府羣玉」「卷之十八」と書す。本文首一葉楮紙、

その他は藁精紙印。卷十八首匡郭一九・三×一二・五糶。

墨筆にて欄上韻目、語目標注、本文語目傍点書入、朱傍線書入

あり。大尾下辺に「葺」墨識墨減。同じく欄上に「葺

于／存身窩／押」墨識あり。

〈忠南大学校中央図書館 F・二四のうち〉

卷一至三 十至十四 十八配同版本

卷十六 十九配〔朝鮮前期〕刊本

卷五を存す（九冊のうち一冊）新補表紙（二五・七×一五・六

糶）。次で丁子染宝文空押艶出表紙、左肩打付に「韻府羣玉（卷

之五）」と書す。卷五第五張匡郭二〇・四×一二・三糶。首三

張欠。

墨筆にて語目傍点書入あり。旧前表紙右下方に墨識あるも擦消。

〈忠南大学校中央図書館 F・二四のうち〉

卷一至三 五 十一至十四 十八配同版本

卷十六 十九配〔朝鮮前期〕刊本

卷十を存す（九冊のうち一冊）。新補表紙（二八・五×一六・

四糶）。次で後補淡黄色正繫文空押艶出表紙、左肩に「韻府群

玉（卷之十）」と書す。卷十首匡郭一八・五×一二・四糶。

朱筆にて字目傍点書入、墨筆にて毎張欄上に韻目標注、間々

本文標出書入あり。

〈忠南大学校中央図書館 F・二四のうち〉

卷一至三 五 十至十二 十八配同版本

卷十六 十九配〔朝鮮前期〕刊本

卷十三至十四を存す（九冊のうち一冊）。新補表紙（二六・九

×一五・六糶）。次で丁子染艶出表紙、左肩打付に「韻府羣玉

（十三 四）」と、右肩より韻目を書す。前見返し詩草。（毎冊

二卷）。卷十三第五十八、五十七張錯綴。卷十三首匡郭二〇・

二×一二・四糶。

墨筆にて欄上韻目、本文字目墨囲書入あり。

〈忠南大学校中央図書館 F・二四〉

欠卷四 六至九 十五 十七 二十 卷三 五 十三至 九冊

十四 十八配同版本 卷十六 十九配〔朝鮮前期〕刊本

新補黄色表紙(二五・三×一五・五種)左肩に墨囲し「韻府羣玉序(幾卷/卷幾)」と書す。卷十一至十二の冊は次で焦茶色表紙、左肩題簽を貼布して「韻府羣玉(六)」と書し、前見返しに韻目を書す。首に序のみを存し本文。(毎冊二卷)。卷首匡郭二〇・〇×一二・三種。後印本。

墨筆にて欄上韻目、間々本文に標点書入あり。

同号全九冊のうち、卷一至二、十二至十二の二冊は同装、伝来を同じくするが、他は六種の別伝本に当たするため、前後六項に分け別記した。

同

〔朝鮮前期〕刊 覆朝鮮明正統二年跋刊本

四周双辺(一九・八×一二・五種)。版心、中黒口、稀に花口魚尾の張あり。原本記無界、卷二首題下の声目を墨囲せず。

〔忠南大学校中央図書館 F・二四のうち〕

公文紙印 卷一至三 五 十至十四 十八配朝鮮明正統二

年跋刊本

卷十六、十九を存す(九冊のうち二冊)。新補表紙(二四・一×一五・五種)。次で丁子染宝整文空押艶出表紙、左肩打付に「韻府羣玉」と、右肩より韻目を書す。天地截断。本文料紙背面に「賑廳錢文下記」等公文並に朱文公印記あり。卷十六首匡郭二〇・〇×一二・四種。早印本。

墨筆にて欄上韻目、本文字目標点書入あり。第二冊首尾に単辺方形陽刻不明朱印記を存す。

以上、全体に関する事項は前版後印本の項に掲出した。

右の忠南大学校蔵諸本から、版本審定上、特記すべき旧蔵者等を得ることはできなかった。ただ〔朝鮮前期〕刊本に公文紙印本が見られた点は、本版を宣祖十八年(一五八五)以前、中央官署の刊行と考えた推論と矛盾しない²⁾。

○洪武韻本之属

本属は本書の原本から派生したもので、明に入って洪武韻が新定され、それに合せて幾つかの韻書が改編された際に、南京

国子監より行われた本文である。もと二十巻であった巻立も、本文の改編に伴い十八巻に改めた。原本の款式を活かしつつ、『洪武正韻』の掲載順に適合させたため、行単位で本文が前後し、入れ換えた行の首末では、記事を加えたり減らしたりする操作が施された。

該本につき、かつて長澤規矩也氏が洪武八年（二三七五）の宋濂の題記を附刻した伝本を著録しているが、今日まで確認していない。但し宋濂の『宋学士文集』卷三十八に「韻府群玉後題」の一篇を収め、その内容が知られている。

韻府羣玉十八卷

明闕名改編

〔明初〕刊 〔通修〕覆〔洪武八年序〕刊本

本版は、洪武初刊本の覆刻と見られ、巻立や本文はこれに同じであるが、後掲の香港大学図書館蔵本には、洪武八年の跋を伴わない。以下に重複を恐れず、その構成や版式を記述する。

先ず滕序（一紙）、首題「韻府羣玉序」、次行より本文（中略）

翰林滕賚序」。每行十六字。中縫部題「序」。

滕序そのものは、元統二年（二三三四）刊行の原本以来、諸本に附刻するもの。但し諸本は滕賚の後、行を接して姚雲、趙孟頫、陰応夢（竹楚）、陰幼達、陰時遇の序、計六篇を列挙するが、本版では首篇のみを存する。⁴⁾

次で目錄（四張）、首題「韻府羣玉目錄」、卷十八に至る。中縫部題「群玉目錄」、本文に行を接して尾題「韻府羣玉目錄」。

諸本には原序の後、目錄の前に「増修韻府羣玉凡例」と「韻府羣玉該載事目」を存するが、後掲の著録本にはこれを欠いている。

首題「韻府羣玉卷之一／平聲／一東、次行より本文。

卷之一（二六張）	平聲	一東
卷之二（四二張）	二支至	三齊
卷之三（六七張）	四魚至	七灰
卷之四（六〇張）	八真至	十刪
卷之五（七二張）	十一先至	十四歌
卷之六（五七張）	十五麻至	十七陽
卷之七（四九張）	十八庚	
卷之八（五三張）	十九尤至	二十二塩

卷之九 (五二張) 上声 一董至 四語

卷之十 (四四張) 五姥至 九旱

卷之十一 (五四張) 十產至 十七養

卷之十二 (四二張) 十八梗至二十二賺

卷之十三 (三一張) 去声 一送至 二寘

卷之十四 (七二張) 三霽至 八震

卷之十五 (四九張) 九翰至 十四箇

卷之十六 (五一張) 十五禡至二十二艶

卷之十七 (第一至七十八、七十八至七十九張)

入声 一屋至 五屑

卷之十八 (第一至七十五、七十六之七十七、七十八

至九十三張) 六葉至 十葉

四周及辺 (二一・二×二・五種) 有界、每半張十行、行小二十九字。版心、小黑口、双線黒魚尾(向)問題「韻府群玉卷幾」、張数。上辺に字数、下辺に工名を附刻す。

(工名) 王可□、王□□、王名、祖□、*翁子敬、□□祥、棲

景、王吉賢、*孫成、朱寿、沈福、*茅公輔、繆玉原、胡工芳、

*倪平山、鄭迪、*徐孟賢、*于公平、趙莊、童旋、李□、孫

延年、張來名、張□之、*何沢之、*張德名、*顧恭、章良之、

*范安、徐傑、*周伯名、*趙仁山、夏景初、趙良、林文、范□、

高莊、*沈茂、*季名遠、李孟賢、陳巨源、林実、張均佐、顧□、

干父、張清之、*張好古、*錢德裕、*陶士中、沈文、*屠名

道、范德莊、陳真、李中、葉仲□、徐孟好、繆士原、陶俊、王

貴、*張仲剛、潘宗、*張繼道、張官、袁子名、張彦信、羊性

初、王洁輕、張通輔、*楊仲□、傅□子、*陶彦名、*楊(羊)

茂卿、*具公亮、潘玘宗、□仲森、張亨、*許彦□、朱仁、劉

子□、朱伯和、陳彦昭、林仲阜、季贊、*張克明、張伯讓、王

安、傅繼之、蘇仲達、*袁子寧、潘玉宗、*倪谷賓、□彦伯。

尾題「韻府羣玉卷之幾(十八終)」。

工名中、*符を附した者は、明洪武三年(二三七〇)序刊(南監)本「元史」の工名に合致し、本版も〔洪武八年序〕刊本同様に、南監刊本に当たる可能性がある⁵⁾。

本版の後掲本中には、版心が黒口で字様の異なる張子が見られ、その多くに他の張子には見られない「徐珩」の工名をもつ特色がある。対查の便宜を得ないが、補刻の可能性があるため、以下にこれを列挙する。

卷二十九至三十張、卷四第七至八張、卷五第二十八張、

卷六第十七至二十二、三十二張、卷七第五、十九至二十、二十五至二十六張、卷八第五、十一至十二、三十五、四十三（原工名「雇恭」あり）張、卷九第二、三十三張、卷十第一、二十一、四十四張、卷十一第三十三至三十五、三十七、三十九至四十張、卷十五第二十五至二十七張、卷十八第六十六至六十七張。

〈香港大学馮平山図書館 善八〇二・四三・七八〉 二十八冊

清黃裔旧蔵

後補淡茶色漉目表紙（二五・八×一六・二種）首、第十六冊のみ左肩に題簽を貼布し単辺中に「韻府羣玉」「へい」と書す。本文料紙、毎張天地に二紙を継ぐ。襖紙改装。毎冊前後に淡朱紙、宣紙副葉各一枚を存す。首冊のみ前宣紙副葉後半に別紙を貼り、双辺有界「韻府羣玉（隸書）」と書し封面とす。滕序、目録を存し本文。卷三、四、六、十一、十四、十七を二冊、卷五、十八を三冊に分ける他、毎冊一卷。

首に単辺楕円形陽刻「蒼雪軒」朱印記、毎冊首、卷首に同方形「梅亭曹氏藏書」朱印記、目首に方形陰刻「修徳／□間」、単辺方形陽刻「超然／物外」朱印記、卷首に方形陰刻「王印／湘春」、単辺方形陽刻「大／文」朱印記、卷三首に単辺方形陰刻

「南海／式之／蘇氏／所藏」、同陽刻「蘇／式倫」朱印記を存す。

さて、前者では本属の版本を一種と見做し、初印本と〔明〕修本があるものとした。^⑤〔明〕修本は、上海図書館に蔵し、卷三至四、八至十を存する残本一套のみの著録であった。これは、初印本の布施美術館蔵本と十分な対査を行わずに同版と比定した後、上図本に、「徐珩」の工名をもち、補刻らしき箇所が見することから、洪武刊本の後修本と判断したものであった。

これは、該版について、『南離志経籍考』卷下に「正徳丁卯重加修補繕刻、有祭酒濟南王敕識」と記していたことから、正徳二年（一五〇七）丁卯修本と予見しての著録であった。

しかし今回、本版の著録を得て見ると、上図本の補刻箇所と工名は、洪武刊本ではなく本版に合致し、前者の記述は誤りと確認された。ここに上図本を、当該の〔明初〕刊本と訂正する。

○新增説文本之属

〔韻府〕原本の最古版である元元統二年（一三三四）刊本の版本は、元末明初まで梅溪書院に置かれ、修刻を重ねていった

が、その一部は元至正十五年（一三五六）以前に建安の劉氏日新堂に分与された。日新堂は、言わば公式の増修者として、本書の新增説文を作り出したのである。

この「新增説文」とは、『説文解字』そのものではなく、『説文』を引用した『古今韻会舉要』（元）刊（後修）本から重引する増益であった。しかも当然ながら、元統の原版を保存する卷十至十五の間は原本のままとする、不徹底の補修であった。

この点は、至正版の後、「正統二年（一四三七）」梁氏安定堂刊本、天順六年（一四六二）葉氏南山書堂刊本、「明前期」刊本、弘治六至七年（一四九三―一四九四）劉氏日新書堂刊本、弘治七年劉氏安定書堂刊本と、本属が明前期に版を重ねる中で、弘治六至七年刊本の段階で卷十至十五の間にも及ぼされ、完遂された。

本属は、新たに王元貞校本や新增説文直音本を派生し明末に及んでいるが、在来の新增説文本は、明弘治七年刊本を以て重版を終えた。同版は概そ嘉靖年間まで印行されたが、今般その最末期の印本を著録し得たため、版本の概要とともに、以下に記したい。

新增説文韻府羣玉二十卷

元闕名増 明闕名再増

明弘治七年（一四九四）刊（劉氏安定書堂）

覆明弘治六至七年刊本

先ず「韻府羣玉序」／（格低）翰林 滕玉霄序」「姚江村序」「翰林承旨趙子昂題」「陰竹埜序」「陰復春自序」「陰勁弦自序」。

次で「韻府羣玉目錄」。後印本は第二行下に「新增一東宗風戎

四韻并新序首八十板」の語を追刻す。

次で「韻府羣玉事類總目」。

次で「韻府羣玉凡例」。末尾に「一元本上聲七麌韻内堵字起至去聲十七霰字韻／止並闕説文今悉増入」の一条あり。

凡例末に双辺有界（以格低）「是書元大德丁未瑞陽陰先生所編板／行久矣至於（據）皇明正統間梁氏安定堂重刊於各字下／續増

許氏説文雖加詳明然中間未免／差舛闕畧觀者不能無憾本堂三復

加／校考至上聲七麌韻内堵字韻起至去／聲十七霰字韻止凡二千

三百有奇並／闕説文今悉増入幸得其全收書君子／但將原書對校

瞭然悉備摠龜於斯不／煩考之他韻敬粹以行嘉興四方共之／弘治

甲寅孟夏劉氏安定書堂 謹識」牌記を存す。

卷首題「新增説文韻府羣玉卷之一 上平聲（韻闕）／（以下低）晚

學陰時夫勁弦編輯／新吳陰中夫復春編註」、次行低二格
二東（獨用）、次行より本文。先ず字目（字次）、直下より注（小字）。
每韻改行。卷之二十に至る。卷一尾「鬚」字増補。

四周双辺（二一・〇×一三・二種）有界、每半張十一行、行小
二十九字。版心、中黒口（周接外）、双線黒魚尾（向不対）、上尾下題「勻
玉幾フ」、下尾下張数。卷一尾に双辺有界兩行「弘治甲寅孟冬
／安正書堂重刊」、卷三尾に「劉氏安正堂」、卷六尾に同「弘治
甲寅孟夏之吉／劉氏安正書堂重刊」、卷十八尾に同「弘治甲寅
劉氏／重増校正刊行」、第二十卷尾に祥雲中「福」字下童形神
捧持蓮花中双辺単行「弘治甲寅劉氏重刊（上四字左傾）」の牌記を存す。
卷尾題「新増説文韻府羣玉卷之幾 声目（墨闕）」。

又 嘉靖三年（一五二四）修

卷二十末尾の張子を彫り替え、告文を「嘉靖甲申劉氏重刊」
と変えた。以下、前著に録し得なかつた本文補刻の箇所を、後
掲の伝本に拠つて示す。

卷一第三至八、十三至二十八、卷二第一至二十四、二十七至
四十、四十七至四十九張、卷三第一至十八、二十一至三十六、

三十九至四十二、四十五至四十六、五十三張、卷四第一至二十
二、二十七至三十八、四十三至四十六、四十九至五十六張、卷
五第一至二、五、九至十四、十九至二十二、二十七至三十二、
三十九至四十、四十三至五十八張、卷六第一至二、五至十六、
二十三至三十、三十三至三十六、三十九至四十二、四十五至四
十八張、卷七第一至六、九至十四、二十一至二十五、二十八至
三十、三十七至四十六張、卷八第三至四、十一至二十、二十七
至三十四、四十一至四十二、四十五至四十八張、卷九第三至四
十三、四十五張、卷十第三至六、十三至十六、十九至二十二、
二十七至二十八張、卷十一第三至十二、十九至二十、四十一至
四十二張、卷十二第九至十六、十九至二十、二十九至三十、三
十七至四十張、卷十三第一至六、十九至二十、二十七至二十八、
三十三至三十六、四十一至五十二張、卷十四第三至四、十一至
十四、十九至二十八、三十一至三十六張、卷十五第七至八、十
七至二十四、二十九至三十、三十二至三十三、三十九至四十八
張、卷十六第一至二、七至八、十一至十二、十五至二十、三十
一至三十二、三十九至四十張、卷十七第一至六、十一至十四、
二十一至二十六、三十三至三十四張、卷十八第一至四、九至二
十、二十三至二十四、二十七至三十、三十五至三十六、三十九

至四十張、卷十九第一至十、十三至十四、十七至十八、二十七至二十八張、卷二十第十七至十八、二十一至二十四、二十九至三十張。

〈福建師範大学図書館 〇三五・LS五三〉 三十二冊

後補黄色金沙子散表紙(二四・六×一五・三浬)。淡青包角。

毎冊前後副葉。目錄、総目を存し本文。卷一至二、六至七、十二、十四、十七、十九を一冊とする他、毎卷二冊。卷四第六十張、卷九第四十四張鈔補。卷首匡郭二〇・八×一三・三浬。毎卷末葉の料紙を刪去するため、卷三尾以外の刊記を見ない。

卷首、第七冊首に方形陰刻「禪□/俠□」朱印記、卷首、第七、十三、二十冊首に同「玄對/樓」朱印記、卷首、第九、二十四冊首に単辺方形陽刻「馬氏順/安珍藏」朱印記を存す。

○新增説文王元貞校本之属

元末に登場した新增説文本は、原本を凌ぐ勢いで流通し、前述のように、明前期に建安の書肆から重版を続けた。しかし、その結果、新增説文本の本文には相応の劣化を来し、墨釘や誤

刻を多く含む情況に陥っていた。

この情況を一新したのが、明万曆十八年(一五九〇)頃に刊行された、本書の王元貞校本である。王元貞は南京の富家出身で太学に在籍し、選挙に中ることは叶わなかったが、文士として王世貞の周辺で活動した人物であり、活動の主要な項目として出版が挙げられる。

王氏刊本には、現在七種の版刻が知られ、本書もその一である。王氏は自身で校刊を行って家刻本の形式を踏みつつ、稿本を手成して、直接刻工に委ねたらしい。

本書新增説文本も、再編当初の至正版に拠りながら、弘治版を用いて全編に校正を加え、版式字様も白口の方匠体に改められた。本属はこの万曆十八年序刊本を起点に、明末の覆版二種を産み出した。

さらに清朝に入ってから、康熙五十五年(一七一六)文盛堂天德堂刊本、萃華堂刊本、乾隆二十三年(一七五九)芸経堂刊本、乾隆二十四年敦化堂刊本、別種〔清〕刊本、文秀堂刊本、大文堂刊本、文光堂刊本、聚錦堂刊本、元亨堂刊本、謙益堂刊本、資善堂刊本の、少なくとも十二版と、各種後印本を産んだ。また増刪本之属、摘要本之属の亜種三版をも派生し、明清の間

に最大の流行を示している。このことから、万暦版は、元明に衰えた本書の命脈を、再生する役割を果たしたと言える。

本属にも新たに補うべき伝本に接し得たため、以下に最小限、版本の様態を述べた後、個別の伝本を掲げ参考_(大)に供し_(小)たい。

先ず「韻府羣玉序」／元人陰氏兄弟著韻府羣玉京師／舊有梓本歲久板漶漫難讀學士／病焉吾友王孟起秣陵人也家藏／墳典于書無所不窺學富半豹目／無全牛詩歌之暇校而新之洗魚／魯金根之繆音釋既明剗尤精／甄林爭傳幾于紙貴請余引其端／余謂（中略）／萬曆庚寅夏日五嶽山人沔陽陳／文燭玉叔撰_(櫟)。末張前半末行の下辺に「金陵徐智督刊」記あり。

次で「韻府羣玉序」翰林 滕玉霄序「姚江村序」「翰林承旨趙子昂題」「陰竹埜序」「陰復春自序」「陰勁弦自序」を存す。

次で「韻府羣玉凡例」。末尾に「二元本上聲七麩韻内堵字起至去聲十七韻字韻止／並闕說文今悉增入」一条あり。末張前半の末行下に「金陵徐智督刻」記を存す。

次で「韻府羣玉目錄」。

次で「韻府羣玉事類總目」あり。

卷首題「新增說文韻府羣玉卷之一_(櫟)上平聲_(墨開双)／_(以下低)（八格）

晚學 陰 時夫 勁弦 編輯／新 吳 陰 中夫 復春 編註
／秣陵 王 元貞 孟起 校正、次行低二格標「一東（獨用）」
等韻目、次行より本文。先ず字目_(大)、直下より注_(小)（双行）。每
韻改行。卷之二十に至る。

左右双辺（二一・四×一三・四種）有界、每半張十一行、行二
十二字、方匠体。版心、白口、上辺題「韻府羣玉」、單線黒魚
尾下標「卷之幾」、張数。

卷尾題「新增說文韻府羣玉卷之幾」或いは「韻府羣玉卷之一」
「新增說文韻府羣玉大全卷之十四」等。

又 三修

卷三第四十三至四十四張、卷七第五十一至五十二張、卷八第
三至十、二十一至二十二張、卷十三第七張より卷十五第四十四
張に及ぶ、ほぼ三卷分と、卷二十第七張に補刻がある。

〈香港中文大学図書館 AG17/Y5/1590〉

〔江戸前期〕標補注書入

十冊

前方のみ新補紫色表紙（二五・五×一五・七種）。次で後補栗

皮表紙、左肩に題簽を貼布し（間、剝落）「韻府群玉〈幾ノ幾〉

〈何声〉と、右肩に目録題簽を貼布し声韻目を書す。首冊のみ

題簽を新補し「韻府群玉（一之二ノ上平声）」と、其の下に又

紙箋を貼り「全十冊之内」と書す。中央目録題簽に掛け打付に

又別筆にて「百番」と大書し、重ねて紙箋を貼り「第六十四

号」と朱書す。每冊右下に小簽を新補し矩形に「人〈幾〉」と

書す。五針眼、改糸。虫損修補。每冊旧前見返しに一九六八年

六月六日付の欧文受入れ印記あり。每冊首に斐楮混漉紙の副葉

を補い（江戸前期）筆にて巻数韻目、張数を書す。陳序、原序、

凡例、目録、総目を存し本文。每冊二卷。卷首匡郭二一・一×

一三・三糎。

首尾欄上に（江戸前期）墨字目標注、首のみ朱筆にて每韻首版

心上韻目標注、欄上朱墨補注、朱字目標点書入あり。縹色或いは

素不審紙。每冊後補前表紙右方に小簽を貼布し朱筆にて单边

方形陽刻「圭齋／藏書櫛録」印記を模写す。每冊首に梅花図□

／黄／昏」朱印記を存す。

本版は日本に数多く伝来する版種で、この伝本もその例に当

たる。即ち、日本に伝存しない下記覆版之一の情況と兼ねて、

その偏在する様子を窺わせるものと言える。『香港中文大学図

書館古籍善本書録』四七三著録。

同

〔明末〕刊 覆明萬曆十八年序刊本 其之一

卷首匡郭二一・二×一三・六糎。卷首題下の声目「上平聲」

牌記单边。版心張数下、卷一第一至四張以下の横界を欠かず。

また卷二第四張前半、卷四第五張後半、卷五第六十張、卷十三

第三十五張後半、卷十八第五十一張後半に墨釘あり。

〈福建師範大学図書館 〇三五・LS五三〉

十冊

新補香色表紙（二六・五×一六・九糎）、第三冊に茶色地「韻

府羣玉書録（魯儂題籤）」墨書、单边方形陽陰刻「臣／澄波」

印朱鈴題簽を差夾む。淡青包角剝落痕あり。陳序、凡例、目録、

総目、原序を存し本文。每冊二卷。

首のみ欄外墨補注書入あり。第三冊に題簽別手「韻府羣玉／

（以下低）壽花盒主／所藏」墨書、方形陰刻「閔氏／所臧」印朱

鈴紙箋を差夾む。第四冊首に同「書主／之事」朱印記を存す。

同

〔明末〕刊 覆明萬曆十八年序刊本 其之二

卷首匡郭二一・三×一三・六種。卷首題下声目の牌記双辺。

版心張数下、卷一第一至四張以下の横界を欠かず。また卷二第十七張後半、同第二十張前半、卷十九第六張前半に墨釘あり。

又修 後印（文樞堂呉桂宇）

封面、単辺有界「陰勁弦／王孟起」兩先生新增訂正／韻府群玉（楷體）／（低）文樞堂呉桂宇梓」牌記。陳序題目の首二字「韻府」補刻、原序より総目までの版心張数（第一至十）を、凡例第一至二、目錄第一至三、総目第四とする挖改があった。また本文卷十八第五十三至五十四張を欠き、本文は補わず、第五十五至五十六張版心の張数を一部刪去して「五十三」「五十□」とした。

〈龍谷大学大宮図書館 八二二・一〇〇—W・二〉 合五冊

西本願寺旧蔵

新補洋装（二四・五×一六・一種）。旧二十冊を五冊に合す。

合冊中に香色旧表紙（二四・〇×一種）、左肩打付に「何到某」と韻目を書す。天地截断。封面白紙印。陳序、原序、凡例、目錄を存し本文。毎旧冊一卷、毎冊四卷。卷二十第四十九至五十張欠。

旧第二冊前見返しに「〔江戸後期〕墨補注書入、末尾に「右日知録／辛卯七月六日」と書す。本文稀に朱傍点書入、稀に別朱傍圈、標点、同藍筆曲截、標点書入、欄上間、墨標補注書入あり。標色不審紙。毎旧冊首、卷首に単辺方形陽刻「桂林／藏書」朱印記、毎旧冊前見返しに同楕円形「寫字臺／之藏書」朱印記（西本願寺所用）を存す。

同

〔清〕刊（大文堂）

封面、四周三辺單字牌「陰勁弦／王孟起」兩先生輯註／重鐫韻府羣／玉原本（楷體）「大文堂／藏板」。陳序首題「韻府羣玉叙」（三張）、徐智刊刻記なし。卷首題下牌記「〔上平聲〕」。卷首匡郭二〇・九×一三・四種（図版一）。

〈忠南大学校中央図書館 一五七 鶴山文庫〉 二十冊

香色表紙（二五・八×一五・八糎）。左肩打付に「韻府羣玉巻幾」、右肩より韻目を書す。封面黄紙印。陳序、原序、凡例、目録を存し本文。毎冊一卷。

本版の伝本について、現在まで韓国に偏在する結果を得ており、同書肆と朝鮮王朝とに何等かの関係を有するものと推される。

○統編之属

明代の半ば、成化弘治の間（一四六五—一五〇五）に、浙江青田県出身の学官包瑜が『韻府』の統編、『類聚古今韻府統編』（以下「韻府統編」と簡稱）を編集した。前述の如く、既に元末には『韻府』原編の増補本である『新增説文韻府群玉』が登場し、明代前半に版を重ねていたが、この『韻府統編』は、原編とは別に集められた内容で、韻部に基づく編集と各部の構成は原編と同様であるが、この度の標準には洪武韻が採用され、巻立は四十巻とされた。また内容の面でも、従来、韻藻として挙げられた語彙は二字、三字の熟語が主であったが、『韻府統編』

では、四字から五字、六字に及ぶ成句が数多く挙げられた。

本属には総じて三種の版本が認められる。前者の標記に基づいて挙げれば、明正徳十二年（一五一七）刊本、〔明〕刊本、明嘉靖三年（一五二四）刊本の三種で、〔明〕刊本には二十八巻の不全本と、四十巻の増修本とがある。⁷⁾正徳刊本と〔明〕刊本は、巻首と増修部分に於いては本文款式を同じくするが、二十八巻までの中間では、正徳刊本を節略した本文を有つ。また嘉靖刊本は、巻一及び巻二十九以降に原編の新增説文直音本を用いた混態本であり、巻数も三十二に止まる。

つまり『韻府統編』の正徳刊本は、初刊にして唯一の原態本であり、後に朝鮮と日本に流布した『韻府』増統会通本の、一方の原拠となった点でも、非常に重要な版種と言える。但し今日、本版の伝存は極めて稀で、前者の段階では原本の書誌調査を行うことがかなわず、鎮江市博物館収蔵と伝える『四庫全書存目叢書』子部一七三至四に影印の版本に拠り、考証を行つて来た。⁸⁾

ところが近時、大韓民国大田市に在る忠南大学校中央図書館に於いて『韻府統編』の明版を閲覧した所、同本は本書正徳版の残欠本であり、同版の『存目叢書』収録本にはない、自跋と

刊記を含むことが判明した。そこで本稿では、内容上、前著に重なる点も多いが、本版の様態を省略せずに掲出し、当該原本の書誌を附記する措置としたい。またその際、著録の修訂を反映し、明正徳十二至十三年刊と標記する。

類聚古今韻府續編四十卷

明包瑜編

明正徳十二至十三年（一五七―一七八）刊（劉宗器安止書堂）

先ず張時叙序（二張）、首題「類聚古今韻府續編大全序」、次行より一格を低し本文「事理之在天下古今至不一也不有以會之／孰從而知之此韻／府羣玉之所以脩而續編之所以緝也致政／掌教青田包先生（瑜）／以景泰庚午鄉薦歷建／寧臨淄進賢淳梁四學教諭自幼好學至老／不倦常以陰氏韻府所收事有未備故為續／編以補其略既成編而遇者欲為作興梓／行而中遭多故弗果遂弘治丁巳之冬予奉／（據）命來宰青田知有是編因取徧閱則見其間該／載甚富自經傳子史以及百家衆說罔不畢／集一開卷間瞭然在目異聞未見多所長益／予甚悅之因令人重校繕寫發付書林劉（宗）（器）氏刊刻以廣其傳（中略）是編為卷凡／四十有四今日一出將與四

方識者共之書／成欲有所識故書是語於首用識其所以續／（以下）之意云（（據））弘治十二年歲在己未秋八月吉／賜進士文林郎青田縣知縣渤海張時叙序。每半張九行、行十八字。中縫部題「韻府序」、尾題「韻府續編大全序（畢）」。

張序第二張前半は「存目叢書」影印本に欠損があり、前著では重刻本に抛り補ったが、今回は原本に抛り掲出した。

張序第二張、本文末に行を接し、尾題前低三格、粗黒口の柱兩条の下に双辺有界（（以下））韻府一書自皇元大徳丁未陰氏所著經今二百／餘年今有青田包先生常觀是書其中收有未備／者故搜求玉海通考事文類聚 皇明一統志等／書續補其畧以得其全名曰韻府續編如正徳丙／子安正堂劉宗器氏得求藁本捐資謄寫刊刻類／有二千餘板今刊一東字起至「鄴字勻」止序目一／十餘板共四十卷姑且印行以示賢明君子便以／觀看瞭然（在目）書成通行印賣以便觀覽幸甚（（據））正徳丁丑孟秋之吉書林安正堂劉宗器 謹識一牌記あり（「」内挖改む）。

次で潘琴序（第三至四張）、首題「類聚古今韻府續編大全序」、次行より一格を低し本文「（中略）予友青田包君／講校之暇日取群玉之編續以所聞於經史傳記／者隨韻增入窮搜廣別積累既久遂成大帙（中略）曩者僉憲盱江王公華巡土／至邑得是編而閱之

甚喜慨然曰成人之美吾職／也亟給紙墨副其本欲咨閩藩舊知梓之書林而／行之業以邁疾而寢無乃此志之行與否亦固有／遇不遇時耶君屢貽予書曰吾平生精力殆盡于／此凡十易稿而後定予素知我必得一言以為信／今傳後之徵乎夫君之為學志乎（中略）君名〈瑜〉字希賢心靜而學富由鄉薦歷儒／官四十餘年只今行年八十猶能書細字盡一燭／不倦平生著述甚多此特其一者耳予知之深故／不辭蕪陋而題其端／（以下）（單據）弘治十二年龍集己未秋八月望／賜進士中順大夫福建興化府知府致仕鶴山潘琴序」。每半張十行、行二十字。中縫部題、尾題同前。

次で凡例（第五張）、首題「類聚古今韻府續編大全凡例」、次行より一つ書下低一格諱字擡頭にて本文、六条。每半張十一行、行二十字。中縫部題「韻府凡例」、尾題「韻府續編大全凡例〈畢〉」。

次で周礼序（二張）、首題「増廣韻府大全序」、次行より本文（中略）自元至大庚戌。以迨／國朝正德癸酉。上下一百餘年家傳人誦無／可擬議。我鄉青田包夫子出。増續是書。總四／十卷。探蹟索隱。鈎深致遠。（中略）今建陽安正堂劉氏。徵／復校讐。梓行天下。予聞之。喜而不寐。（中略）／正德昭陽作噩之歲仲秋月哉生魄／（格低三）餘杭後學靜軒周禮書于護國山莊」。每半張十

行、行十七字。中縫部題「序」、尾題「序〈畢〉」。

次で目錄（四張）、首題「韻府續編大全目錄」。卷四十、入声十葉韻に至る。中縫部題「目錄」、尾題「韻府大全目錄〈畢〉」。

卷首題「類聚古今韻府續編卷之一」（隔六）平聲（墨間）／（格低七）後學青田包瑜編輯、「新刊古今韻府續編卷之二十九」（隔小）去聲」等。次行低二格「二東」等韻目（大）、直下より低二格にて「東冬○通○同童僮瞳」等直音（小字）、次行より本文、先ず大字にて「東」等字目（同首字的首變、首は双迎）、直下より注（小字）。次で「賦

河東」等語目（中字、單行）、直下より注（小字）。注中標目字「一」符代号、注の尾に「韓（陰刻、或いは墨間）」等出処を附す。每韻改行。

- 卷之一（七三張） 平声 一東
- 卷之二（六四張） 二支
- 卷之三（二五張） 三齊
- 卷之四（四三張） 四魚
- 卷之五（三七張） 五模
- 卷之六（五三張） 六皆至 七灰
- 卷之七（三八張） 八眞上
- 卷之八（四七張） 八眞下
- 卷之九（三六張） 九寒至 十刪

- 卷之十 (四八張) 十一先
- 卷之十一 (二五張) 十二蕭至 十三爻
- 卷之十二 (二八張) 十四歌至 十六遮
- 卷之十三 (四四張) 十七陽
- 卷之十四 (五四張) 十八庚一至三
- 卷之十五 (一至二十五、「廿六」至廿八、「二十九」至三十二張) 十八庚四⁹⁾
- 卷之十六 (一至四十四、「四十一」、「四十六張) 十九尤
- 卷之十七 (三八張) 二十侵至二十二塩
- 卷之十八 (五五張) 上声 一董至 二紙三
- 卷之十九 (四七張) 二紙四至 三齊下
- 卷之二十 (三二張) 四語
- 卷之二十一 (一至二十二、二十五至三十九張) 五姥⁹⁾
- 卷之二十二 (四八張) 六解至 十一銑
- 卷之二十三 (四三張) 十二篠至 十四智
- 卷之二十四 (一至二十五、「二十五」、「二十七至二十八張) 十五馬至 十七養
- 卷之二十五 (三五張) 十八梗至二十二琰
- 卷之二十六 (一一張) 去声 一送
- 卷之二十七 (三七張) 二眞三至 三霽下
- 卷之二十八 (五五張) 四御至 七隊
- 卷之二十九 (四三張) 九翰至 十一霰
- 卷之三十 (五九張) 十二嘯至 十七漾下
- 卷之三十一 (四九張) 十八敬上至二十二豔
- 卷之三十二 (五〇張) 入声 一屋
- 卷之三十三 (二八張) 二質一至二
- 卷之三十四 (三四張) 二質王至四
- 卷之三十五 (四六張) 三曷至 五屑下
- 卷之三十六 (四一張) 六藥
- 卷之三十七 (二八張) 七陌一至二
- 卷之三十八 (二五張) 七陌三至四
- 卷之三十九 (三一張) 七陌五至六
- 卷之四十 (五五張) 八緝至 十葉
- 四周双辺 (二一・一×二・八種) 有界、每半張十一行、行小二十九字。版心、中黒口(上接内、下接外周)、上辺題「韻(勻)府大全」、双線黒魚尾(向_{不好})、上尾下標「卷之幾(フ)」、下尾下張数。卷一第九至十二張上尾に「六」と陰刻。
- 卷尾題「韻府續編卷之一(墨四 陰刻)」「類聚古今韻府續編卷之幾」「新

刊古今韻府續編卷之二十九(隔小十格)去聲」等、大尾題「新刊類聚古今韻府續編卷之四十終」「入聲畢」。

大尾題前に六格を低し双辺有界「正徳丁丑仲秋／京兆劉氏安正／書堂新增葉行」牌記あり。

次で包瑜跋(二張)、首題「類聚古今韻府續編大全後序」、次行より一格を低し本文「韻府續編有四十餘卷成化丙戌(瑜)時忝掌／山東臨淄教事每於讀書之間遇有事語可／資引用者因考陰氏韻府群玉多有未載輒／加札記日積月累漸以成帙甲午調江西進／賢常以自隨戊戌改浮梁屢復增益庚子之／冬遇蒙(總舉)淮王殿下聞而取觀猶以為未廣因盡出所藏／群書恣之採擇以成是編丁未之春休致還／郷他無所為惟此是務彙凡經十改易弘治／壬子平陽太尹臨川王侯約出賃倡首欲為／興作青田宰公建昌余侯大經資助紙墨集／人膽藁甲寅秋仲乃承浙江憲僉盱江王公／華訪取覽視爰命温州推官雲周公珙擇／人繕寫以需刊刻既而憲僉物故王尹陟憲／臺余宰以事罷去竟不能成惟將藏之篋笥／待時而已己未之秋滄州張公時叙以進士／來為令尹志欲作成而連年嬰疾後又取為／兵部主事而卒亦不能成於戲(瑜)之所緝初／欲自備遺忘粗資考閱而已非敢傳諸達者／以招不躓之責也中間屢承當道諸公欲為／興作而升沉不一將成復沮今(瑜)老矣仍遇／嘉會固不欲如蔡邕之

秘論衡亦不敢如左／思之叙都賦略書述作始末與夫際遇之由／以識諸末簡使觀者知(瑜)用工之勤立志之／篤而推善與人同之意若其間採擇之未詳／去取之未當者博雅君子成人之美掩其瑕／疵而增潤之使天下後世不沒其善而全其／名不勝幸甚(低八格)稽古齋青田包(瑜)謹識」。每半張九行、行十八字。中縫部題「韻府後序」、尾題「韻府續編大全後序(畢)」。

包跋尾題前に六格を低し双辺有界「正徳戊寅孟春劉／氏安正書堂刊行」牌記あり(図版二)。

包瑜自跋後の正徳十三年(一五一八)戊寅の刊記は、自跋と共に「存目叢書」影印本に欠くもので、最終的に本版の刊行が、同年に及んだことを示している。

また本書編集の経緯は、これまでも概ね明らかであったが、自跋によってさらに判然と了解される。以下その記述に基づいて、編集の始末を整理してみた。まず跋文に句読を附して翻字施注し、以下に再掲する(改行稿者)。

韻府續編、有四十餘卷。成化丙戌(二年)、瑜時忝掌山東臨淄教事、每於讀書之間、遇有事語、可資引用者、因考陰氏韻府羣玉、多有未載。輒加札記、日積月累、漸以成帙。

甲午(成化十年)調江西進賢、常以自隨。戊戌(同十四年)

改浮梁、屢復增益。庚子（同十六年）之冬、遇蒙淮王殿下（朱祁銓）聞而取觀、猶以爲未廣。因盡出所藏羣書、恣之採擇、以成是編。丁未（同二十三年）之春、休致還鄉、他無所爲、惟此是務、藁凡經十改易。

弘治壬子（五年）平陽太尹臨川王侯、約出貲、倡首欲爲興作。青田宰公建昌余侯、大經資助紙墨、集人謄藁。甲寅（同七年）秋仲、乃承浙江憲僉盱江王公華、訪取覽視、爰命溫州推官雲間周公珙、擇人繕寫、以需刊刻。旣而憲僉物故、王尹陟憲臺、余宰以事罷去、竟不能成。惟將藏之篋笥、待時而已。己未（同十二年）之秋、滄州張公時叙、以進士來爲令尹。志欲作成、而連年嬰疾、後又取爲兵部主事而卒、亦不能成。

於戲、瑜之所緝、初欲自備遺忘、粗資考閱而已。非敢傳諸達者、以招不韙之責也。中間屢承、當道諸公欲爲興作。而升沈不一、將成復沮。今瑜老矣。仍遇嘉會、固不欲如蔡邕之祕論衡、亦不敢如左思之叙都賦。畧書述作始末、與夫際遇之由、以識諸末簡、使觀者知瑜用工之勤、立志之篤、而推善與人同之意。若其間採擇之未詳、去取之未當者、博雅君子、成人之美、掩其瑕疵、而增潤之、使天下後世、不沒

其善、而全其名、不勝幸甚。稽古齋青田包瑜謹識。

右を要約すれば、まず『韻府統編』四十教卷は、包瑜が山東臨淄県学の教官であつた明成化二年（一四六六）頃、原編『韻府』未収の故事や語句を集め、編輯が進められた。次いで同十年に江西進賢県に調任した際も手許に随え、同十四年に同浮梁県に転じてからも増益する所があつた。さらに同十六年、淮王朱祁銓に本書を進覽し、その藏書を恣に用いて増補を加え、編輯を完成したが、同二十三年に致仕、郷里の江西青田に帰つてからも、屢々その稿を改めた、というのである（第一段）。

包氏の履歴について、本書張序に抛り、景泰庚午元年（一四五〇）の郷薦の中つて、福建建寧府以下四学に任官したことが知られていたが、それぞれの任官の時期が自跋に抛り明らかになつた。またその致仕の年については、従来弘治十二年（一四九九）の潘序の「由郷薦歴儒官四十餘年、只今年八十」の記述から弘治三年（一四九〇）以後と考えられたが、跋文には三年早い成化二十三年（一四八七）であつたことが明らかである。そこで新たに、潘序の言は後年の誤解と捉え直し、前著を訂正する。さらに淮王の聘を受けた時期について、『栝葉蒼紀』卷十二に録する包の小伝に「由舉人任教諭、致政歸。淮王幣聘修

書、進講便殿、賜坐忘勢」とあることから、致仕後のことと考えたが、これは誤読で、実際の応募は浮梁県学在任中の、成化十六年のことであった。併せて訂正したい。

さて、本書の刊行が図られたのは編者致仕後、弘治年間のことであり、まず同五年（一四九二）に浙江温州府平陽知県の王氏が出資を約し、浙江青田知県の余氏がこれを助け、稿本の謄写を行った。次いで同七年に浙江僉都御史の王華が来訪して本書を取り上げ、温州府推官の周珙に命じて謄写させ、版刻が準備された。ところが王華は物故し、県令の王氏は昇任して去り、余氏も県官を離れたため、事業は頓挫を来した。同十二年以前に張時叙が青田知県に就任し、再び刊行の気運が高まったが、張氏の疾病と転任卒去に遭い、再び中断を餘儀なくされた（第二段）。

本書の首に冠する弘治十二年（一四九九）の張、潘両序は、王華の事業を継承した張氏再興の節に附された。潘序に拠れば、王華の手配に係るものの、版刻そのものは福建の書肆に託されており、張序を見ると、弘治十二年の段階で既に、建陽の劉宗器安正書堂が、これを担ったものと知られる。しかしこの際には刊行に至らず、再度の挫折の後に、当該の自跋が書かれたの

である。

包跋の第三段は、齢八十を過ぎ、編者の秘匿を欲しない編者の心境を綴るが、そこに本書の刊行に向かう文言は全く見られない。そして、弘治十二年からは十四年を経た、正徳八年（一五一三）癸酉の周礼の序に至り、ようやく劉氏安正堂に依る版刻の趨勢が見出される。但し包跋には四十餘巻とあつた巻数は、現存本と同じ四十巻ちょうどに縮約され、さらに四、五年を経た、正徳十二至十三年に漸く刊行されたのである。

包跋の記述に拠り、新たに包氏官歴の細情と「稽古齋」の号も知られるが、殊に重要な点は、本跋が、弘治十二年の段階に於ける、版刻の未完を明示していることである。結局の所、本書は、刊記三条に見える通り、事業に関わつて来た劉氏安正堂の手に依つて初めて完成されたのであつた。このことは同時に、本書を用いて編集された『増統会通韻府群玉』の成立が、正徳十三年（一五一八）以降であることも意味している。

又 後修

後掲本の巻二十八は第五十三至五十四張を欠き、末尾第五十

五張の張数を「五三」に、卷二十九は第四十一至四十二張を欠き、末尾第四十三張の張数を「四一」に改め、それぞれ欠板を糊塗する。

○増続会通本之属

開上、極めて重要と言える。

〈忠南大学校中央図書館 F・一〇〉

十六冊

欠卷 二至三 五 七 十 十三 十七至十八 三十一至三十二 三十五至三十六

後補藍色蓮華唐草文空押艶出表紙(二五・五×一四・七糎)左肩に題簽を貼布し「韻府續編」と書す。五針眼。書背下段に「共二十」と書す。破損修補。首に張序、潘序、凡例、周序、目錄を存し本文。卷六第一至五張、卷二十四第二十四張、卷三十第三十三至三十四張欠。卷二十四第二十五張を重綴。尾に包跋あり。

墨字目傍点書入。每冊首に単辺方形陽刻「夏／山」、方形陰刻「書印／奩永」朱印記(慶尚道昌寧曹氏)、每冊首尾に「鄭喜陸家／藏書冊帙(楷)」紫印記を存す。

該本が韓国に伝来した点も、本版がある程度朝鮮に流布し、増続会通本の原拠となった事実を徴証する意味から、本書の展

本属は、本書の新增説文本と、右の『韻府統編』を合輯して編み出された本文で、朝鮮中宗朝(一五〇六―一四四)末以降に編集され、宣祖の初年に当たたる明隆慶二年(一五六八)以前に刊行されて、まず朝鮮朝に行われた。

該本の編集は、中宗三十五年(一五四〇)に発議され、暗主として排撃された前代燕山君の寵臣である李希輔の関わったことが、『中宗実録』三十九年の条に見えている。

本属の朝鮮本は、みな活字印刷に拠り、乙亥字本、戊申字本の二種がある。乙亥字本には増修本もあり、また後に見るよう
に本属から、増続会通改編本をも派生した。この改編本には、
訓練都監字刊本一種がある。

本属の流通は朝鮮に止まらず、近世初以降の日本に波及した。
朝鮮本中、乙亥字本の伝来が確認できる他、同(後修)本に拠つた、寛永二年(一六二五)田中長左衛門刊行の古活字本と、その覆版である延宝三年(一六七五)八尾勘兵衛刊本を存する。

これらは中世以来の本書原本、新增説文本と並び、近世の日本漢学に一定の基礎を提供した。

本属の日本刊本について若干、伝本の補遺があるため、やはり簡潔に掲示したい。

増續會通韻府群玉三十八卷

〔朝鮮李希輔等〕編

日本寛永二年（一六二五）刊（古活字 京田中長左衛門）

翻朝鮮乙亥字刊（後修）本

題簽、双辺「増續韻府」声目／幾（毎冊同版、双行部分のみ活字にて組み換え）。

卷首題「増續會通韻府群玉卷之一（隔五）上平聲（墨刻）／（以下低陰刻）」

學陰 時夫 勁弦 編輯／新吳 陰 中夫 復春 編註

／青田 包瑤 希賢 續編、次行低二格「一東（獨用）」等韻目、次行より本文。先ず「東」等字目（大字、双行）、直下より注（小字）。次で「道東」等語目（大字、单行）、直下より注（小字）。又「續（墨刻）」と標し、直下に「賦河東」等と語目（大字、单行）、さらに注（陰刻）。毎字首行欄上に字目標出。毎韻改行。卷之三十八に至る。

四周双辺（二一・〇×一六・三糎）有界、每半張十行、行十八字、古活字。版心、中黒口（接内）、双花口魚尾（対）問題「群玉幾」、下尾下張数。

卷尾題「増續會通韻府群玉卷之幾終（大尾）」。

大尾に「寛永二年（乙丑）初春吉日（格低四）洛陽玉屋町田中長左衛門開刊」記あり。

〔天理大学附属天理図書館 八二一・イ五五〕 二十一冊

〔龍谷大学大宮図書館 〇二四・三・九八六一〕 一冊

〔家蔵〕 二冊

欠卷三 六 十二 十九 二十二 二十八 三十 三十三 三十八 〔妙心寺〕大通院（顕州）宗密旧蔵

標色雷文繫蓮華唐草文空押艶出表紙（二八・五×二〇・四糎）

左肩刷り題簽貼附。右肩打付に韻目を書す。押し八双あり。前後副葉。卷十五至十六を一冊とする他は毎冊一卷。尾題有「終」。

極稀に（江戸初）朱豎句点、同墨欄上補注、欄上後墨補注（広韻、朱子語類、通鑑注、字典、明史、明紀事本末、香祖筆記、唐詩鼓吹、清異録等引証）、書根貼紙補注（解題および参同契引証）書入。毎冊首尾に単辺円形陽刻「大／通」、毎冊首に布

引証）書入。毎冊首尾に単辺円形陽刻「大／通」、毎冊首に布

団形陽刻「宗／密」朱印記、卷一、三十一至三十二首に方形陰刻「白雲堂／圖書記」、単辺方形陽刻「古家實三／愛藏之書」朱印記、天理分の卷二十三首に方形陰刻「賓／南」、単辺楕円形陽刻「殘花書屋(書行)」、同「戸川氏／藏書記」朱印記（戸川浜男所用）、家藏分の卷二、三十二前見返しに単辺方形陽刻「鯨舎／臧記」朱印記を存す。

上記の伝本は前者に録したが、龍谷大学大宮図書館に僚冊を見出したため、再掲した。龍谷大学の卷二十四には大通、宗密の他に藏書印なく、昭和二十四年（一九四九）の受入れ印がある。

同 闕名點

日本延寶三年（一六七五）刊（京八尾勘兵衛）

覆寛永二年古活字刊本

題簽及辺「増續韻府〈声目／韻目〉幾(書行)」。

四周双辺（二一・四×一六・一糎）無界。但し間、単辺、有界。欄上字目有郭。

巻尾題「増續會通韻府群玉卷之二」等、大尾題「増續會通韻府

群玉卷之三十八終 大尾」。

大尾に「延寶三歳乙卯仲冬日(以下低)（京寺町本能寺前）／八尾勘兵衛板行」記あり。

〈龍谷大学大宮図書館 八二二・三二一W〉 三十八冊

西本願寺旧蔵

縹色艶出表紙（二七・三×一九・六糎）左肩に題簽を貼附す。五針眼。每冊一卷。

每冊前見返しに単辺楕円形陽刻「寫字臺／之臧書」朱印記（西本願寺所用）を存す。

〈龍谷大学大宮図書館 八二二・一〇八一W〉 三十八冊

西本願寺旧蔵

縹色艶出表紙（二七・三×一九・六糎）左肩に題簽を貼附す。四針眼。每冊一卷。同蔵本よりやや後印。

每冊前見返しに単辺楕円形陽刻「寫字臺／之臧書」朱印記（西本願寺所用）を存す。

○増続会通改編本之属

本属は、増続会通本の朝鮮乙亥字刊〔通〕修本に依拠し、仄声の部分省略、平声の諸卷のみについて「詩譜」と標する例句を増補した本文で、下記一種のみを伝存する。

同 □□卷

朝鮮闕名増刪

〔朝鮮中期〕刊〔訓練都監字〕 扱乙亥字刊〔通〕修本

卷首題「増續會通韻府羣玉卷之幾／(以下低三格)晚學 陰 時夫
勁弦 編輯／新吳 陰 中夫 復春 編註／青田 包 瑜
希賢 續編」、次行低二格標「一東〔獨用〕」等韻目、次行より本文。体式は乙亥字本及び、前記寛永二年刊本に同様である。
每韻後改行低一格にて「詩譜(双辺)〔新增〕」と標し、次行より小字双行二段にて「光升必自東〔日〕」以下例句。

卷之一 (七五張) 上平 一東
卷之二 (五〇張) 一東二 (自楓)
卷之三 (六九張) 二冬至 三江
卷之四 (八一張) 四支

卷之五 (八〇張) 四支二 (自尼)
卷之六 (七六張) 五微不至 六魚 (至遠)
卷之七 (七六張) 六魚二至 七虞
卷之八 (七四張) 七虞二 (自雛)
卷之九 (六七張) 八齊至 九佳
卷之十 (六二張) 十灰
卷之十一 (七八張) 十一真 (至困)
卷之十二 (六八張) 十一真二至十二文
卷之十三 (七四張) 十三元
卷之十四 (九五張) 十四寒至 十五刪
卷之十五 (七八張) 下平 一先 (至怪)
卷之十六 (七六張) 一先二至 二蕭
卷之十七 (六二張) 三看至 四豪
卷之十八 (一〇三張) 五歌至 六麻
卷之十九 (八〇張) 七陽
卷之二十 (七六張) 七陽二 (自常)
卷之二十一 (七一張) 八庚 (至清)
卷之二十二 (四八張) 八庚二
卷之二十三 (存一至九、十一張) 九青

四周双辺（二四・八×一五・九糎）有界、每半張九行、行十七字、甲寅字体。版心、白口^{（接内）}双花口魚尾^{（向対）}問題「羣玉幾」、張数。巻尾題「増續會通韻府羣玉卷之幾」（図版三）。

墨筆にて字目標注、語目傍点、鈔補、藍筆にて字目標点、標圈書入あり。毎冊首に単辺方形陽刻不明朱印記を存し墨滅。第九冊尾に「冊主李^{（花）}押」識語あり。

該本の巻数について、前著に著録本より帰納し、原裝と推される表紙に「共二十一」等とあることから、全二十一巻と推定した。^⑫しかしこれは、後掲の忠南大学校中央図書館蔵本に巻二十二、二十三を存することから、失考であり、巻数を未詳と改めた。この巻数の問題については、伝本を記述した後、さらに触れたい。また前著に巻六の韻目を誤記していたため、標記を改めた。

右の伝本は現存十八冊、末尾を例外として毎冊一巻の装訂であることから、中間の欠四巻を各一冊と考えれば、表紙にある通り全二十二冊となる。そこで現存巻二十三を末巻とし、全二十三巻と見ることができ、前著に於いて全二十一巻とした推定も、同様の手続を経た結論であったから、別に伝来する巻二十四以降の存在を否定できず、本稿では巻数未詳とし、後考に俟つこととした。

（忠南大学校中央図書館 一三五）

十八冊

欠巻四至五 十八至十九

黄檗柴雷文繫蓮華唐草文空押艶出表紙（三三・八×二〇・八糎）

左肩打付に「韻府羣玉（幾）」と、右下方に「共二十二」と書す。

右肩打付に別筆にて韻目を書す。首五張欠、書根に残紙を存す。

前見返しに韻目を書す。後見返し詩草（第九冊「贈送琉球國使僧」）。巻二十二、二十三を一冊とする他、毎冊一巻。

また一方、全二十一巻本と録した根拠の新たな解釈としては、本書印出のある段階に、暫時二十一巻のみで行われた可能性が考えられる。その意味では、巻二十三で終止する右伝本の形も、末尾残欠ではなく、印行の一段階を徴するものであるかも知れない。本書の内容から見ると、平声の末尾まで残り数巻を存することが予期されるが、現存本はいずれも、平声末に向け漸進する様相を呈しており、やはり最終的には完備しなかったものと見て措きたい。

以上、五機閣収蔵の十八本に調査を加え、七属十二版種に涉つて前著の補正を行った。

このうち、洪武韻本の〔明初〕刊本は、原拠本と同一視していた誤記を、新たに別種と判定、著録した。また新增説文本の明弘治七年刊嘉靖三年修本では、本文補刻の箇所を補足した。

続編の正徳十二至十三年刊本については、初めて原本に基づく記述を行い、影印に見えなかつた自跋と刊記を踏まえ、新たに編集刊行の経緯を述べて、著録を改正した。また増統会通改編本の〔朝鮮中期〕訓練都監字刊本は、前者に不完全であつた著録を補い、卷数の推定に関する失考を改めた。その他の三属九版種については、伝本の記述を補つた。

今回、本書の中でも、朝鮮と日本に流通して大きな影響を及ぼした増統会通本の起点となる明版『類聚韻府』の初刊本を、韓国で著録し得たことは、編者の経歴と編刊の始末を知る上で、貴重な情報を汲み取れるのみでなく、同書の朝鮮への伝播と増統会通本成立の基礎を徴証する点で、重要な提示となつた。その他にも、様々なレヴェルの訂正を生じてしまつたが、暫時の措置として本稿に著し、今後の再考に期することとしたい。

〔注〕

(1) 続編之属については、正確には陰氏編書の直接の展開とは言えないが、『韻府群玉』諸本に取り込まれて、その通行に大きな影響を与えたため、本稿では便宜的に、派生の諸本として取り扱ふ。

(2) 本版陽明文庫蔵本紙背官文書に宣祖六年(一五七三)至十五年間の公文が見え、布施美術館蔵本紙背に甲寅字試印の痕跡が見出されることから、延世大学校中央図書館蔵趙穆旧蔵本の「乙酉春印于漢中」の識語が、宣祖十八年漢城に印刷の意義と解され、版刻についてはそれ以前と考えられる。拙著『中世日本漢学の基礎研究 韻類編』(二〇一一、汲古書院)二四九至二五〇頁。

(3) 長澤規矩也氏「明初刊本五種」(『積翠先生華甲壽記念論集』、同記念会、一九四二、『長澤規矩也著作集』卷三(一九八三、汲古書院)再録)に「薄井恭一君が近獲の明洪武刊本韻府羣玉」の目錄の末に、洪武八年の宋濂の記を存するものとする。

(4) 本版ではちょうど滕賓序の末を以て一張の末尾に至り、著録一本では以下を欠くことから、元來首篇のみであるかどうか、確定できない。しかし、諸本では各篇の首に「翰林 滕玉霄序」等と小題を標出しているが、本版ではこれを省いて一張に収めるこ

とから、便宜首篇のみと推定し記述した。

- (5) 本版と〔洪武八年（一三七五）序〕刊本の工名は、全く一致せず、かつ本版は『元史』と、また〔洪武八年序〕刊本は、同年南監刊本『洪武正韻』や、同じく〔明初〕覆元刊本の『南史』『北史』『遼史』『金史』と一致する関係にある。つまり、明初の南監では、複数の刻工集団が正史や韻書の版刻を分担し、『韻府群玉』については、何等かの理由で二組の版本が刊行されたことになる。両者の先後関係については、現在のところ、両版の部分的比較による稿者の審定に従うのみ、記して後考に俟ちたい。

また本版の刊行時期について、恐らくは『元史』完刻以降のことであろうが、正確には著し得ない。しかし宋濂の題記により、洪武八年に本書を再編したことが知られるので、その刊行も、同年以降ということになる。なお、本版の工名の中には、洪武版『元史』の中で明代補刻の刻工と共通する者が含まれている。本版刊行時期の推定については、なお『元史』補刻過程の究明を経なければならぬ。

- (6) 注(2) 拙著二五五頁。

- (7) 世上に同版二十八卷略本を弘治刊本、同四十卷広略本を正徳刊本とする著録が見られるが、同版は弘治正徳の序を有するもの、

重刻本に当たる。

- (8) 注(2) 拙著四三三頁。稿者は二〇〇七年に鎮江市博物館と、その蔵書を一部移転したと案内を受けた鎮江市図書館を訪れ、閲覧の交渉を行ったが、『四庫全書存目叢書』底本の提示を得ることは出来なかった。

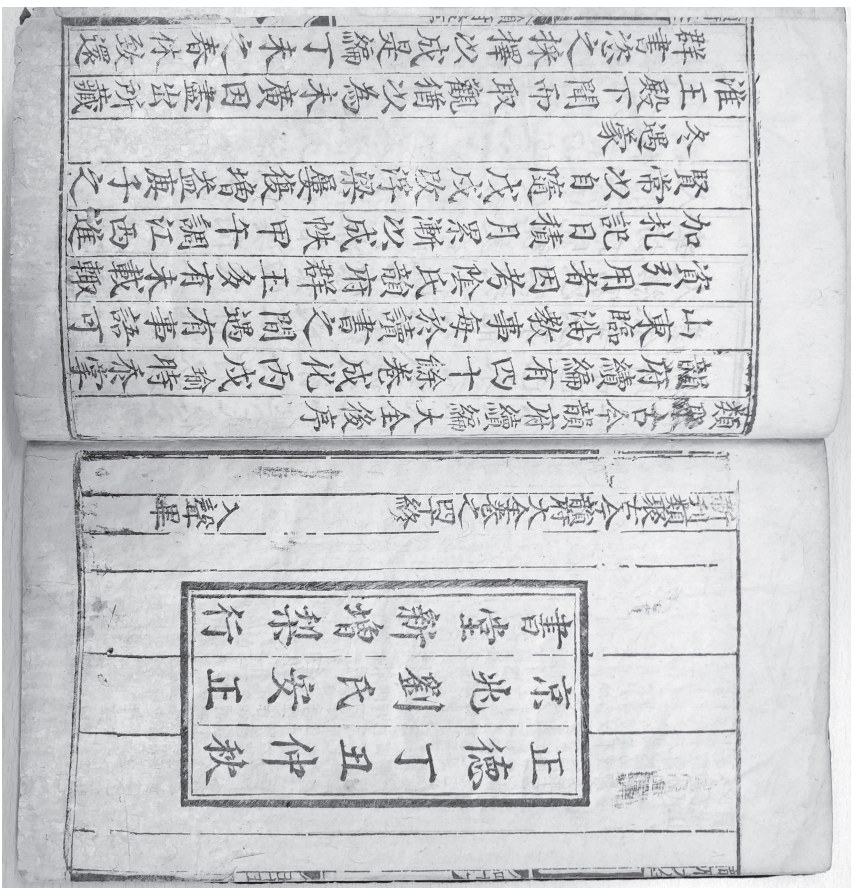
- (9) 現存の『存目叢書』影印本、忠南大学校図書館蔵本とも、巻十五第二十七至二十八張、卷二十一第二十三至二十四張の本文を欠いている。

- (10) 同時代に王守仁、陽明の父華もあるが、その官職の相違や、陽明父は嘉靖元年（一五二二）まで在世していることから、別人と判断される。

- (11) 張序に拠れば、青田県への赴任は弘治十年である。
- (12) 注(2) 拙著四九四頁。

〔附記〕

本稿は平成二十八年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(A)「宮内庁書陵部収蔵漢籍の伝来に関する再検討―デジタルアーカイブの構築を目指して―」(課題番号二四二四二〇〇九)に拠る成果の一部である。



類聚古今韻府續編大全後序

韻府續編有四十餘卷成化丙戌俞時泰掌

山東臨淄教事每於讀書之間遇有事語可

資引用者因考陰氏韻府群玉多有未載輒

加札記日積月累漸以成帙甲午調江西進

賢常以自隨戊戌改浮梁屢復增益庶子之

冬遇蒙

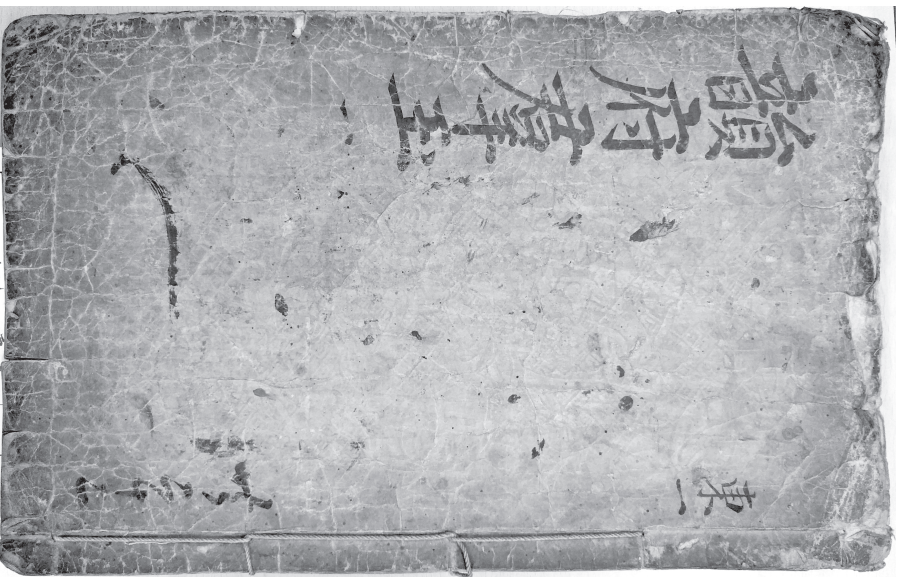
准王殿下聞而取觀循次為未廣因盡出所藏

群書恣之採擇以成是編丁未之春休致還

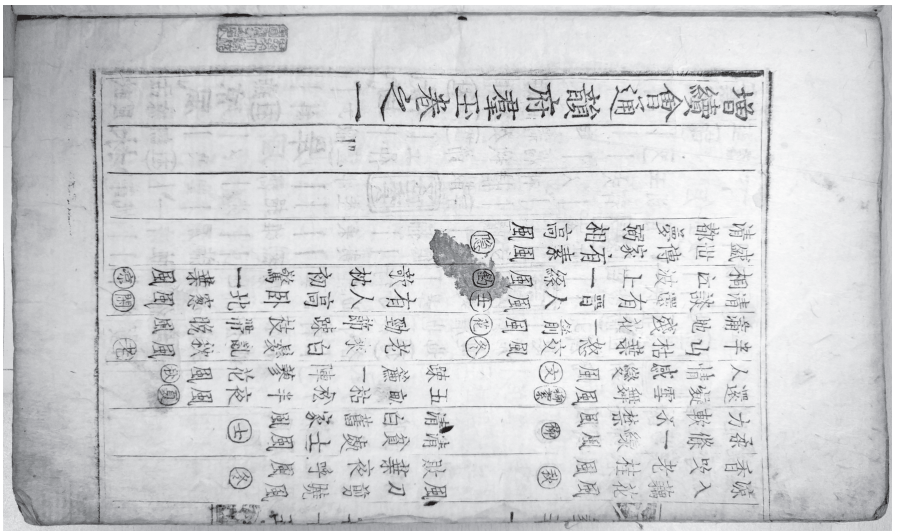
入聲畢

類聚古今韻府續編大全後序

正德丁丑仲秋
京兆劉氏安正
書堂新增梨行



图版三一 增續會通改編〔朝鮮中期〕訓監字刊本 表紙 忠南大學校中央圖書館藏



图版三二 同 卷一尾

圖版三三 同 第九冊後見透

贈送孤城國使
 秋物從金指環相玉墀
 翠立通星口亭北入月守塘
 世如云得英人徑妙洞觀
 屋古海慧持靈庫得枝飲
 善能如契回蛇血瓶連白
 石元宮無奉性之走動
 在生靈有青甫
 清塵雁山如支必疏承故
 如石法家上家
 瀟瀟兮如鶴梁行也遠

冊五卷古

圖版三四 同 卷二十三首

增續會通韻府羣玉卷之二十三

青
 九青獨用
 蘇經切
 丹青炳
 本如響
 一辭譽
 銀青仲
 欲效其
 沙元
 懋思
 之帝
 不擇
 已出
 沙約
 曰後
 知夫象
 勝圖
 三命
 壽金
 蓄家
 玉背
 費一
 且
 嚴一
 言拜
 圖一
 高適
 一
 銅青
 蓄家
 玉背
 費一
 且
 也
 鵝青
 靚綠
 一
 農
 蓄
 一
 外
 高
 青
 一
 石
 劍
 拂
 青
 應
 龍
 一
 空
 青
 又
 龍
 斷
 一
 赴
 汗
 青
 火
 冬
 關
 一
 殺
 青
 吳
 祐
 傳
 以
 寫
 書
 一
 後
 取
 青
 一
 羅
 仲
 紆
 青
 一
 地
 踏
 青
 辛
 兒
 心
 遊
 蜀
 入
 正
 月
 送
 青
 一